１、科目区分　　教職科目 B
　　授業科目名　音楽科教育法Ⅱ
２、科目区分　　学校教育実践コース（音楽専修）、音楽文化コース
　　授業科目名　日本の太鼓⑧

自己学習力を育てるために・・・

音楽教育　石塚真子

Ⅰ、音楽科教育法Ⅱ

１、授業の概要

「音楽科教育法Ⅱ」は、2 年生を対象に後期に開講。受講者は、17 名である。

この授業の目的は、「音楽教育の歩み、目的、内容、学習材、学びのあり方等についての基礎的な知識を得ることによって学校教育における音楽科教育の位置づけや意義について理解する。さらに、音楽の授業を展開するための基礎的な能力を身につける」である。本授業では、教材研究に焦点を当ててとり組んだ。

授業内容は、前半に音楽教育の基礎的な知識や音楽の授業づくりに関する講義、後半は、全体を 2 名の 1 グループで、それぞれのテーマに基づいて授業づくりを行った。

２、授業づくりの考え方と方法を学ぶために

前半は授業づくりにおける基本的な考え方について講義を行ったが、そこで得た知識や方法が実際の授業づくりで活かされるように、各グループで行う授業づくり（模擬授業）に関する教材研究についても資料を作成し、発表の時間をとった。

さらに、授業づくり（模擬授業）については、全員でその授業テーマについて考えることができるように、授業づくりの後に、研究討議を行った。そこで学んだことを、フィードバック資料に記入し、各自で確認するようにした。また、必要に応じて、個人の課題を全体の課題として共有できるようにした。

様々な領域の授業づくりを体験できるようにするために、あらかじめこの授業でとり組みたい内容等から授業づくりのテーマを決めた。テーマは、「歌唱」、「合唱」、「リズム指導」、「読譜指導」「鑑賞」、「創作」、「日本音楽」、「諸民族の音楽」である。自分の興味あるテーマのみとり上げるのも一方法であると考えられるが、「日本音楽」、「諸民族の音楽」のように、これまでに実際に授業を受けた経験の少ない領域の授業づくりにもとり組めるようにした。

また、授業づくりについては、授業外の時間に個別指導を行い、主に教材研究の指導に力を入れた。

３、学生の授業評価

学生自身が、この授業にどのようにとり組んだのか、授業の最終回に質問紙調査を行った。
（回答者数　16 名）

(1)「授業づくり」の事前準備のとり組みについて

A：とり組んだ期間

期間	人数
1 週間	1 名
2 週間	6 名
3 週間	3 名
1 ヶ月	5 名

B：とり組んだ時間

時　間	人数
10～15 時間	4 名
15～20 時間	0 名
20～25 時間	7 名
25～30 時間	3 名
30～35 時間	0 名
35 時間以上	1 名
その他	1 名

全体として、授業づくりについて非常に熱心にとり組んでいた。最低 1 回は個別指導を行い、課題を確認したことで、学習材や学習方法の研究を

深められたのではないかと考えられる。授業づくりからも、その成果が得られた。

また、授業づくりと研究討議を通して学んだことについては、再度指導案を作成・提出することで、全員が何らかの形でフィードバックができたようである。今後は、事前指導だけでなく、事後指導についても充実させたい。

⑵教材研究資料について

今年度から、指導案に加えて、その授業づくりのために、どのような教材研究を行ったのか資料作成と発表を行うようにした。

学生のアンケートからは、この資料に関する評価は良好であった。授業をつくるために、どのような研究が必要で、授業のなかで、それをどのように選択し活用するのか、自分たちなりに考えられたようである。次年度以降もこの方法を続けることによって、音楽の授業研究を深めていきたいと考える。

しかしながら、教材研究担当者と授業担当者とが異なり、連携がとれなかったグループがあったので、指導を工夫したい。

（学生の感想）

教材研究にこんなに真剣に取り組んだのも初めてだったのですが、人に物事を教えるには、教える側はその倍以上その物事について理解しないと、真意が伝わらないこともわかりました。文献や資料探しも、“模擬授業”のために集めるのではなく、日頃から興味を持って勉強したいです。

４、今後の課題

各回の「授業づくり」の課題が、つぎのグループに活かされ、最終的に全員で積み上げた「授業づくり」ができたといえる。テーマの決め方やフィードバック資料の活用等については、概ね良好であったので、今後は、事後の個別指導も加え、授業を充実させたい。

（学生の感想）

実際授業をしてみて、1時間の授業をつくることが、どれほど大変かを痛感しました。今回、私は全くできていませんでしたが、授業で生徒に伝えることに根拠を持たせるためにも、教材に関する研究は怠ってはならないものだと思います。地域の音楽活動を発信していくリーダーというとおこがましいですが、私達はそういった役割を担っていると思います。そのために何ができるか、何をする必要があるのかを考えていきたいと思います。

Ⅱ、日本の太鼓⑧

１、授業の概要

「日本の太鼓⑧」は、4年生を対象に後期に開講。受講者は、5名である。

この授業の目的は、太鼓の実技演習を通して、「民俗芸能の太鼓の演奏・演技を深めるとともに、その音・音楽の構造、つくり方、学び方等を理解すること。さらに、日本の太鼓の教材化についての考え方を学ぶこと」である。

太鼓の実技演習を主体とした授業であるため、授業時間外ではあるが、実技演習が許可されている6時限目に、毎週授業を行った。

２、授業について

「日本の太鼓」の授業は、①～⑧まで開設してきた。通常の授業のように、週1度、太鼓の実技演習が行えるようになったのは、「日本の太鼓④」からである。5名のうち3名が「日本の太鼓④」から、2名が「日本の太鼓⑦」から継続して受講している。

学習材については、学生たちが太鼓の練習をできない状況のなかで、広く浅くレパートリーを増やしていくか、1つの演目を深く追究していくのか迷うところもあったが、学生自身が太鼓とまっすぐに向き合い、表現を深く丁寧に追究できる演目を選択した。

太鼓の実技演習を2年間継続してきた学生にとっては、学びのプロセスのなかで、レパートリーを増やしたいという希望もあったようである。しかし、太鼓の表現の奥深さに気づいてからは、自分の表現の追究へと意識が向かっていった。

問題は、学びが深まれば、太鼓を練習したいという気持ちも高まってくることである。上手になりたい、でも練習はできない。そこで、太鼓を用いずにできる練習をとり入れたり、紹介したりしながら授業を行っていった。毎回授業時に提出する授業記録にも、「今週は、ストレッチやスクワットを行った。」や「回転の部分のステップを練習した」などの自己学習の記録も増え、置かれている環境のなかで、自分なりに努力してくれたようである。

３、授業を終えて

このような環境のなかでも、「日本の太鼓①～⑧」すべてを受講してくれた学生が1名おり、学生たちに助けられながら、授業を成し遂げることができた。何を伝えることができたのか、4年間の実践を振返り、授業のあり方について考えたい。